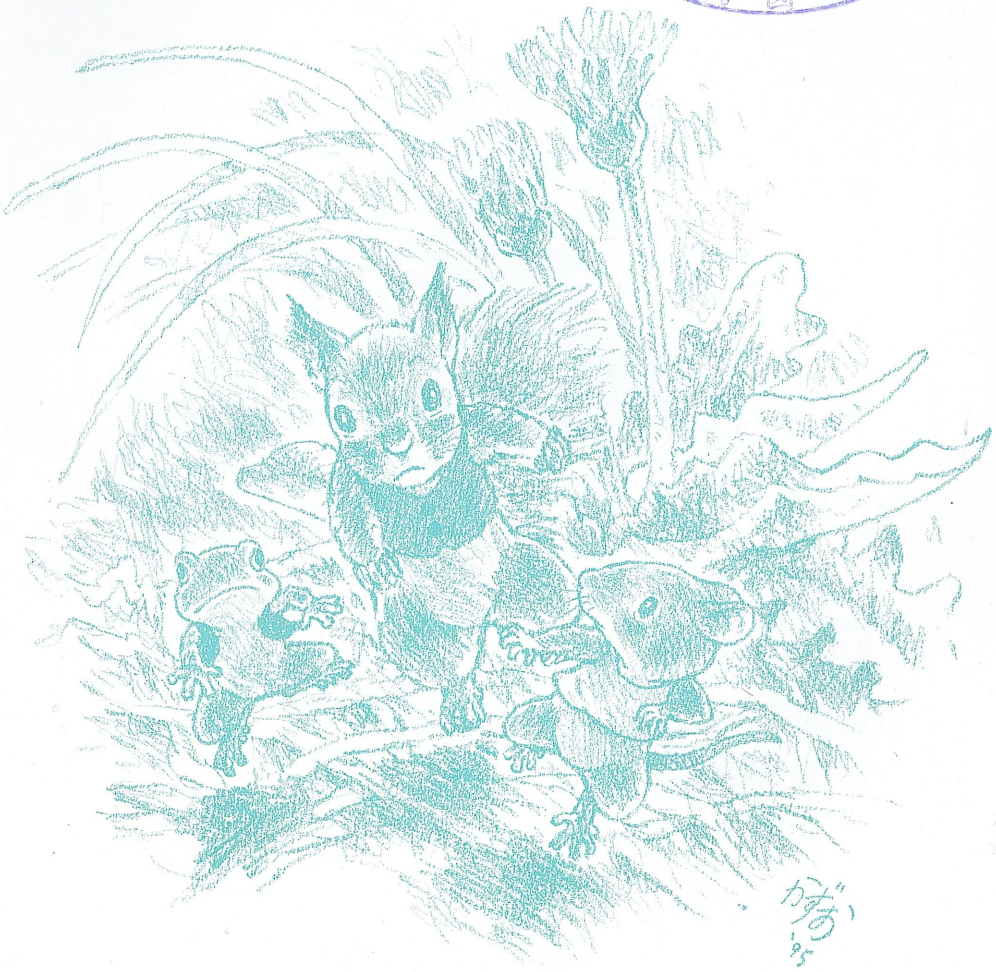
幼児の教育　第95巻　第６号　平成８年６月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

'96 6月号

8. 5. 15

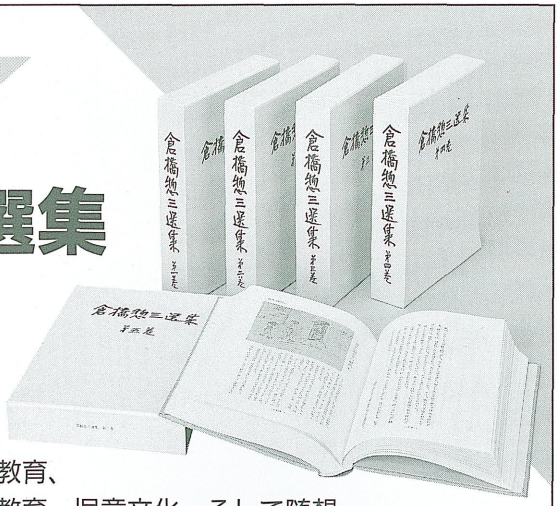
家庭―保育所―幼稚園



第95巻　第６号　日本幼稚園協会

新刊

倉橋惣三選集
(第五巻)



第五巻は、今まで単行本に
収載されなかった
雑誌への寄稿を集めた。
その執筆活動は広く、児童教育、
発達心理学、教師論、家庭教育、児童文化、そして随想、
絵本など多岐にわたる。倉橋惣三の現代につながる先駆的教育論と、
倉橋の全体像が把握できる一巻である。

倉橋惣三・著

上製本ケース付き　B6変型判　512頁　定価3,500円(本体3,398円)

既刊本

わが国の幼児教育の理論を確立した倉橋惣三の教育論・随筆などを集大成した定本です。今でも保育界においては読まれ、語り継がれて保育者にとっては座右の書。

①幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル
②幼稚園雑草
③育ての心・就学前の教育他
④保育案他

上製本各巻ケース付き　B6変型判　416~472頁　各定価3,000円(本体2,913円)

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第95巻　第6号

幼児の教育　目次

——第九十五巻　第六号——

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(3)

少子化時代の幼児教育……太田　次郎…（4）

「大人の世紀」か？……津守　真…（7）

特集〈アレルギーとつきあう〉

小さなハンディがあったからこそ……川口　有理…（14）

そんな、がんばらなくていいんだよ……中村　泰子…（18）

アトピーとの戦い……村田　和子…（24）

みるくせーきの会……田坂　幸代…（28）

アレルギーなんて大したもんじゃない……山田　真…（30）

© 1996
日本幼稚園協会

今、思うこと……山下　恵美…（34）

トポスにおける発達　第八回
子どものビオトープとしての園環境……無藤　隆…（39）

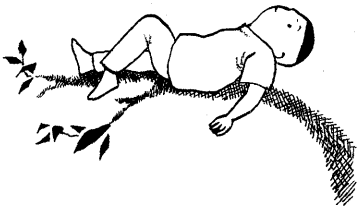
子どもたちへのまなざし(18)　ポーランドの虹……松井　とし…（48）

保育の窓(2)　保育の技術(2)　幼児理解……原口　純子…（50）

ある日の育児日記から(66)……佐藤　和代…（58）

子どもが嫌がる人形劇……永野むつみ…（59）

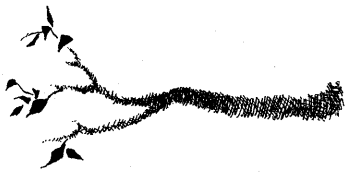
表紙絵・いわむらかずお「なにかありそうだ」
扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ「森の昼下り」
編集委員・田代　和美／伊集院理子・高橋陽子
編集部・仲　明子



二十一世紀にむけて幼児教育を考える(3)

少子化時代の幼児教育

太田　次郎



わが国の出生率の急減が問題となったのが一九九〇年であるから、今年はそのとき生まれた子どもたちが、小学校に入学する年である。その後も、年により少し変動はあるが、出生率の減少傾向が続いている。つまり、子どもが少なくなる少子化時代が進行している。

幼児教育の分野で、この問題は「園の経営難」という観点で、主にとらえられているようである。どうやって幼児を集め、園の経営を安定化させるかに、園長先生方は、頭を悩ましておられる。確かに、そのことも軽視できないが、少子化の影響は、他の面でもいろいろ生じ

ている。特に、注目せねばならぬのは、幼児と母親との接触時間の変化である。その点で、今二極化が進んでいる。

一つの方向は、子どもの数が少なくなったために、母親の手が行き届くことである。それは決して悪いことではないが、ともすると甘やかしに流れたり、同世代の他の子どもと接するよりも、母親のみと過ごす時間の多い子どもになったりする。

もう一つの方向は、職業をもつ母親が増加していることである。それも、男女共同参画の時代で、女性が責任のある地位を獲得するに伴って、子どもと接する時間が少なくなっている。その分、父親が平等に時間をさければ良いかも知れないが、わが国の現実はそうはいかないことが多い。

こうして、少子化時代には、母親と接する時間が多い子と少ない子の二方向に分れつつある。そして、この傾向は、今世紀末から来世紀にかけて、さらに増大していくであろう。

このことが、子どもの生活、特に幼児の行動にどうあらわれてくるかは、まだはっきりしていない。また、幼児教育の研究会でも、経営以外に、少子化の問題をとり上げて論じている例は少ないように思われる。

少子化で子どもは変わるのか、変わらないのか、もし変わるとしたら、どう変わるのかはっきりしていない。むしろ、「変わらない」ということを前提にして、幼児教育は展開されているように思われる。

幼児の教育で、目先の社会の変化に応じた変化は、のぞましくないと筆者は考えている。特に、時代を先取りするような変革は、軽率であると思われる。といっても、何も変わらなくて

良いといえるわけでもない。子ども自身が変化しているとしたら、それに対応しなければならない部分があることも否定できないであろう。

眼に見え、耳に聞こえる世界が変わっているから、幼児の遊びも、時代や環境の変化に影響されることは事実である。このことは、テレビのない時代と、現代とを比べてみれば明らかであろう。しかし、幼児にとって最も重要と思われる「遊び」が、どう変わったのか、それが少子化により変化を受けたか否かも、はっきりしていない。

実際に保育の現場にかかわる方々は、それぞれ身をもって体験されていることが多いに違いない。しかし、それが積み上げられ、後に続く人々へと伝えられていくという面が、幼児教育界では、少ないように思われる。毎年開催される研究会でも、同じことが繰り返される傾向が強いように感じる。

このようなことを記すのは、決して大きな変化をのぞんでいるためではない。しかし、「幼児の本質は変わらない」と安住していると、やがて外圧等によって、のぞましくない変革が行われようとしたとき、それを防ぐ手だてが見い出せないであろう。

少子化という現実は、決して小さな問題ではない。それも、わが国だけでなく、先進諸国に共通した問題であり、それを防ぐ対策はどこの国でも余り成功していない。幼児教育界でも、この問題を各方面から広く考える時代になったのではなかろうか。

（お茶の水女子大学）

「大人の世紀」か？

津守　真

大人の世紀はいつ始まるのか？

前号に述べたエレン・ケイは、二十世紀を「児童の世紀」と提唱した。

今世紀が生んだ著名な心理学者E・H・エリクソンは、人間の生涯の発達を課題とし、一九五〇年には、名著『幼児期と社会』（仁科弥生訳、みすず書房）で乳児期から老年期にいたるまでの人間の発達を八つの段階に分けて各時期の発達の危機と、そこで獲得される徳を明瞭に示した。彼は一九〇二年に生まれてその晩年、一九八二年に『ライフサイクル―その完結』（村瀬孝雄、近藤邦夫訳、みすず書房）を書いて、

数年前に亡くなった。二十世紀を生き抜いた人間研究者といえる。彼は子どもの研究のみでなく、ルター、ガンジーなどの伝記研究などでも知られている。晩年の伝記研究にアメリカ第三代大統領、ジェファソンを主題とした。『歴史のなかのアイデンティティ：一九七三年　ジェファソン記念講演（Dimensions of a New Identity：The 1973 Jefferson Lectures. New York：W. W. Norton 1979）』がある。その最後の章は、「大人の世紀か？」という表題をつけて、彼は次のように言っている。「私が若かったとき、児童の世紀ということがいわれた。それは終わったのか、それは静かにこの時代のものとなったのだと私は考えたい。それ以来、青年の世紀ともいうべき時期を通過した。しかし大人の世紀はいつ始まるのか？」と。児童の世紀を生きたE・H・エリクソンはどのような意味で大人の世紀と言ったのか。

個人の伝記研究と歴史

ジェファソンはアメリカの独立宣言を起草し、建国時代のアメリカをつくった政治家である。E・H・エリクソンは一人の人の伝記研究―ケーススタディーを手がけるにあたって、「ジェファソンは研究の対象なのではない」と明言し、人間を考えるための「導きの光（guiding spirit）」なのだと彼の伝記研究の立場を述べる。エリクソンによれば、ひとりの人の生涯の発達は、これも一回限りのその時代の歴史と切り離し難く織り成されており、歴史をつくる重要な要素である。このことはエリクソン

の扱った歴史上の偉人のことだけでなく、障害をもつ無名の人や、ごくあたりまえの一保育者の場合でも同様であると私は考える。

ジェファソンは政治家であるが、自らを農民と自認したヒューマニストであった。彼はヨーロッパの文化と価値を新大陸に移植しようとしながら、過去の父祖の国への忠誠心を捨て、新大陸に新しいアイデンティティを求めた。個人的な面からいうならば、父親譲りの調査好きであり、また建築にすぐれた興味をもつ多面な人であった。彼は人間は平等であるという固い理念はもちながら、奴隷制度を容認するという矛盾を内にはらんでいた。

矛盾を抱えながらの自我

エリクソンは、ジェファソンの伝記研究にあたり、とくに二つの資料を用いる。ひとつは『ヴァージニア州に関するノート』であり、もうひとつはジェファソンが大統領時代に毎夜四か国語の新訳聖書を比較しながら著作をすすめたという『福音書の注解』である。前者はジェファソン三十八歳のときの著作で、彼が住んでいたヴァージニア州の地理学的調査と統計資料である。彼はその土地の小高い丘「モンティチェロ」に、真に古典的貴族風の、しかもアメリカの自然と融合した建築をつくった。父親はヨーロッパの生粋の貴族の血を引いており、また労働と教育による独立と自己向上の人であった。ここにも矛盾の共存をみる。

E・H・エリクソン自身、一九三〇年代のなかばに、ナチの迫害から逃れてアメリカに亡命したユダヤ人学者であり、移民である。アイデンティティは最後まで彼の課題であったので、ジェファソン研究にあたって、古いアイデンティティの上に新しいアイデンティティをつくることを主題としたのであろう。アイデンティティは一度つくられればそれで変わらないというものではない。それは人生の節目で新たにされねばならない。「共同の未来への自由と、過去の絆からの自由」がジェファソンの課題であった。ジェファソンは多面の人だったが常に自分自身であった。エリクソンは老年期の発達の危機を統合というが、これはひとつにまとめあげるというのではなく、矛盾を抱えたままで持ちこたえる自我を言うのではないだろうか。

個人のアイデンティティと共同体へのアイデンティティ

エリクソンはアイデンティティを定義して次のように言う。「アイデンティティは人の成長と発達を通じて同じ自分自身であるという感覚と同時に、歴史と未来をもったコミュニティ、その神話との一体感の感覚である」と。アイデンティティは個人の生涯の問題であると同時に、共同体の問題である。仲間関係での共同体に対する忠誠は青年期の発達の課題であるが、それは成人期にもちこされる。自分の直接に所属するグループにだけの忠誠心となると、対立するグループには敵対心をもつことになる。それは青年のみでなく、歴史の上でも何度も起ったことであった。エリクソンは

この書物を通して「歴史のあらゆる時代を通じて自分自身の種族が神に与えられた優越性をもつという体系的幻想である偽種族化（pseudo speciation）」を主テーマとする。「偽（pseudo）」というのは「共通の種族としての人間の認識に立つのではなく、異なった民族、国家、信条、階級、政党など小さなグループに対するアイデンティティに固執し、自分たちが選ばれた種族であると考え、とくに危機の時に、民族特有の偏見ある主張のためにすべての人間的な知識、論理、倫理を犠牲にすることである」。現代の民族主義もこれに属する。

「ダーウィンの「種の起源」の提唱の後に、われわれはホロコーストの時代を迎え、ひとつの人種が他よりも優れているのみでなく最も進歩したテクノロジーによって他を絶滅する権利をもつという時代を体験したのであった」とエリクソンが述べるとき、ユダヤ人学者としての彼の痛切な思いが伝わってくる。そして更に現代の世界について彼は次のように述べる。「いまやいかなる国も、超能力の武器を勝手に使うことは許されず（偶発的な虐殺であろうと計画的爆撃であろうと）、無用な民族を絶滅させることはできない。われわれは自分たち自身に対して致命的な危険な種族となった」と。このことは地球規模の世界となった現代にとくにそうである。ジェファソンも広い世界のことを考えた。しかしジェファソンは歩いて行ける範囲を理想実現の世界の範囲と考えた。現代はそれが宇宙の果てにまで及んでいる。しかも現代の巨大なネットワークの中で人々は孤立している。「それを救済するには、周縁と力動的に関

連する、内に中心をもった新しい人を必要としている。勤勉と創造的適応力の中心をもった人間こそがこの国で必要とされている」とエリクソンは言う。共同のアイデンティティと個人のアイデンティティとは共にある。

「アメリカンドリーム、永遠の新しさの共同夢、それは大文字のDで呼ぶ個人の夜の夢なのか。夜の夢は前日の疲労を回復し新しいエネルギーを充填するだけでなくまさに夢見るのである。われわれの個的な古代的な過去のある部分に戻ること、前の日によって引き起こされた疑惑と、過去を呼び起こすシンボルであるイメージを夢見るのである。目覚めてわれわれは、自分がどこにだれといるかだけでなく、自分は誰なのかということについて自分を立て直す。そしてすべての人は、鏡のなかの自分に出会い、範囲を限定し、四隅を限り、新しくその日に向かう準備をなし、その日に召命を受けて労働するのに備える。ここでは、共同のヴィジョンは、われわれの役割を記す衣服の役だけでなく、行動のスタイルにし、その日一日をささえる高揚した実現に至らせる背景として役立つ」。

「TAKE CARE」——育てる人になりなさい

私共が一日をはじめる朝毎に、新しさの感覚を思い起こすことが必要である。子どもは人生の始まりである。やがて青年になり、大人になり、そして老人になる。人生のいろいろの段階を経るごとに、その経験の中での矛盾をひとつの人生の全体の中に

おさめて、再び新たなアイデンティティを創りなおすことが必要になる。これはエリクソンの言う人間の生涯の最終段階の課題である。

エリクソンは「大人の世紀か?」という最後の章で次のように述べる。「子どもがなるもの、なってほしいと願うもの、なってきたものを知らなければ、子どもと青年についての知識は断片的にとどまる」「大人は彼等自身が前の世代から引き継いだ未成熟さを次の世代に引き継がないように互いに助けることを学ぶように」と。育てる人になることが大人になることである。子どもの数が減少したから大人の世紀になるのではない。大人の世紀は、育てることのできる大人への問いからはじまるのであると私は考える。そして最後にエリクソンは「TAKE CARE」という挨拶で結ぶ。彼は成人期に結実する徳を英語でCARE（世話、育てる）という語を用いる。現代ではこの語は人と別れるときの通常の挨拶の語でもある。もともとこの語は、「苦労する、気遣う」という意味である。大人の世紀は、成熟した成人として気を遣い苦労して人間を育てる時代と考えれば、児童の世紀と連続である。（文中引用は私訳）

（愛育養護学校）

特集〈アレルギーとつきあう〉

小さなハンディがあったからこそ

川口　有理

娘が産声をあげたのは、梅雨の晴れ間、たった一日だけ青空の広がった朝でした。二四七〇グラムと痩せっぽちだったことが嘘のように、娘はグイグイ母乳を飲んで大きくなり、生後半年目には標準体重に追いついてしまいました。

娘の右の頬に十円玉位の赤い湿疹ができたのは丁度その頃のことです。それは、みるみるうちに広がり、一週間程で顔全体火傷をしたように赤剝けの状態になってしまいました。

もともと、私も夫も子どもの頃からアレルギー体質で様々な症状を持っていたことと、姪が卵と牛乳のアレルギーで食事療法をしていた経験か

ら、それが恐らくアレルギー性のものであることは容易に想像がついたのですが、そうと分かったら生活そのものの変革を迫られるだろうという予感から、受診をためらったまま幾日かが過ぎて行きました。

そんなある日、軟らかいものなら食べられるようになった娘へとお土産に頂いたカステラを、ひと口娘に食べさせてみたところ、娘は急に泣きわめきながら咳き込み、みるみる顔が膨れ上がり、ぐったりとなってしまったのです。予感的中という思いを頭の片隅に感じながら、しぶしぶ受診したアレルギーの専門外来で、ギョッとするような数値の検査結果を見せられ、諦めの悪い私も、それでやっと観念したのです。娘のアレルゲンは、卵、牛乳、大豆、小麦、米、豚、じゃが芋、とうもろこし、牛、鶏等…とのことで、その日から、それまで考えもしなかった（？）生活が始まりました。食物にアレルギーのある子どもは成長に従い、吸入性のアレルゲン（ダニやハウスダストなど）にも反応するようになるということで、毎日の掃除や布団干しも手抜きができなくなり（してるけど）、無精者の私にはこれが一番の難関でした。又、冷え性の私には勇気のいることでしたが、買ったばかりのカーペットも板の間から外しました。

食物に対しては、検査の結果を参考に、少しずつ色々な食品を試しながら、症状を誘発する食品を捜し、それ以外の食品でバランスを取ってメニューを組むようにしました（口で言うのは簡単なんだけどね……）。

さて、そのような生活を続けて一年程たつと、娘の湿疹は徐々に良くなり、度々起こしていたショック症状や喘息発作も半年単位で減っていきました。もちろん発育も順調です。

ところで、卵、牛乳、大豆の三種は日本人の三大アレルゲンとなっていますが、これらを取らな

いよう意識してみると、今の日本人の食生活がいかにこの限られた食品に依存しているかということに気付かされます。市販の加工食品で、この三つの食品が使われていないものを捜すのは至難の技です。学校給食のメニューなどは良い例で、これらの食品のオンパレードです。卵や牛乳、大豆製品そのものを食べなくても、一日に無意識に摂取されるこれらの量は相当なものなのです。

又、コストを抑えるために、身体にとっての安全性は二の次にされている食品が殆んどです。ある時娘は、近所の子どもに貰ったフルーツキャンディーを口に含んだ途端、呼吸困難と意識不明に陥りました。キャンディーに入っていた黄色四号という着色料が原因のアナフィラキシーショックでした。この様に、抗原性の高い危険な添加物が、子どもの好む菓子に平然と使用されている現状を、多くの人は知りません。その上、娘のような体質を持つ子どもは年々増えているのです。まだ口もきけない小さな娘が命をかけて私にそれを教えてくれたのだと思うと、ひとりでも多くの人たちにそれを伝えなくてはと、気が逸ります。

娘は今、二歳六か月。昨年から、私の看護教員としての仕事の間はおばあちゃんと過ごしていますが、木枯しの中、毎日めいっぱい散歩や外遊びをさせてもらうせいか、薄着で風邪もひかず、アレルギー症状さえ抜かせば、むしろ他の子どもよりも丈夫に育っています。

娘がこれから集団の中で過ごすようになった時、娘の抱える問題を周囲にどう理解して貰うか、又一歩進んで自分たちの問題として考えて貰うにはどうしたらよいかが、今の私の課題です。

そのための土台作りとして一昨年、川口市に「ぽけっとの会」というアレルギー児の親の会を作り、ネットワーク作りを進めています。発足以来、全員参加の形で毎月発行されている「ぽけっと通信」は、情報交換の場として、又、ストレス

の掃け口としてアレルギー児を持つ親たちの心の支えとなっています。昨年暮れには、アレルギー用食品を手がける食品会社に特注（一番重症の児に合わせて皆が同じ物を注文）したアレルギー用のクリスマスブーツとケーキを囲んで、楽しいひとときを過ごしました。普段、友達と同じおやつが食べられず、クリスマスブーツやケーキなど夢のまた夢という食物アレルギーの子どもたちにとっては、大変心はずむ貴重な体験となりました。

食事や生活の面で制約されることの多い娘を、はじめは不憫に思うこともありました。でも、この小さなハンディが娘にとってむしろプラスになっているのでは、とこの頃感じるのです。アレルギーがあったからこそ出合うことのできた沢山の仲間たちもそのひとつですが、娘自身が自分のハンディを通して、又別のハンディを持つ多くの人たちの存在に気付き、社会の中で人はお互いに弱い部分を補い合って生きているのだということに気付けたとしたら、これほど価値のある学びは他にないと思います。

私たち夫婦も、娘のアレルギーとつき合うことによって、今まで何気なくくり返して来たこと、例えば食物を食べることや眠ること、働くこと、物を買うこと、捨てること、人と交わること、そういったひとつひとつのあり方を問い直さなければならない場面が多く、その中で沢山のことを学び、少し成長したようです。

まだまだ子育ての経験も浅く、楽しさも、苦労も、本当の所は分かっていない私たちですが、でもこの先どんなに大変なことがあっても、きっと大丈夫、と言えるくらいの自信はついて、そろそろ二人目をと、考えている今日この頃です。

（ぽけっとの会）

そんな、がんばらなくていいんだよ

中村　泰子

「アトピー」とのつきあい

六歳の女の子の桂と、四歳の男の子の麦。ふたりとも生後一か月ぐらいでアトピーと診断を受けた。

桂はいまでは外見ではほとんどアトピーと気づかない。生卵以外は何でも食べるし、膝や肘の内側とか、おまたや脇の下にいつも引っ掻き傷をつくっているが、痒くなったら自分で薬を塗ったり、タオルで冷やしたりと、ほとんど私の手を煩わすことはない。「掻いてー」と夜中に叫んでも、「うーん」と生返事をしながら私が寝ているものだから、もう当てにしていないらしい。

麦は、アトピーとぜんそくもち。顔も体も引っ

掻き傷だらけ。夜中にいつも「掻いて—」と叫んで二、三回は起きるので、こちらは、寝ぼけながらも冷やしたり、掻いたりしてなんとか寝かしつける。朝はシーツやパンツが血だらけだ（ちょっと悲惨だなあ）。

二歳のときの血液検査で1gE抗体が四四〇〇あって（普通はごく微量らしい）とてもつよいアレルギー体質だと言われてビビッたのと、ちょくちょくぜんそくになっていたので、抗アレルギー薬を常用しながらの食事療法を始めた。

もともと「くらし」や食生活に興味があったのと、子どもは母乳でと思っていたので、一人目ですでに自己流の食事療法を試みていた。でも、あるときししゃもの卵をよけて食べている自分に呆然として以来、制限食は止めていたものの、冷蔵庫に卵も牛乳もないのが普通の食生活だったので、鶏のもの・牛のもの・大豆といういわゆる三大アレルゲンをできるだけ摂らないという食事療法はさして苦ではなかった。

そして保育園でも栄養士さんと相談しながら、アレルゲンを除いた食事を別に作ってもらうようになった。昼は保育園で給食。夜も、私が遅くなることが多いので、そんなときは友だちの家でご飯を食べて待っている。保育園のお迎えを頼むような友だちの家には薬を預けてあって、どの家でも麦のためにお魚や豚肉のメニューにしてくれるし、麦自身も「これ駄目なんだよ—」と自分で選んで食べている。

いまのアトピーとのつきあいは、ゆるやかな食事療法と抗アレルギー薬、肌の状態でステロイドも使い分けて……という状態だ。

「大変だね」と言われると、やっぱり大変だよなあと思うけれど、それが日常になっている。「朝までゆっくり寝かしてくれよ—」と泣きそうになることもあるけれど、たいがいのことは、「まっ、いいか」とやりすごせるようになった。

「いいお母さん」はつらい

そんな私も、かつては何冊もアトピーの本を読み、良いと言われればこっちの医者からあっちの医者へと渡り歩き、食事療法から漢方はもちろん、毎日、おふとんを干して掃除機までかけていた。

でも、あるとき「もう、いいや」と思ってやめてしまった。根がずぼらなのでめんどうになったとか、仕事を始めて忙しくなったということもあるけれど、「いいお母さん」というのにとらわれている自分がイヤになったから。

「かわいそうね、かゆそうね」と言われると、自分の育児を否定されているようで、母親の愛情が足りないと言われているようで、すごいプレッシャーを感じていた。いま思えば相当まいっていたんだと思う。

「お母さんの愛情が何より大事、だからがんばって」。病院でも、保育園でも、たまたま電車で隣り合わせたおばさんにすら言われた善意の言葉は、実はとてもつらかったんだよね。

がんばらなくてもいいんだよ

とても一生懸命にアトピーと闘ってきた友人がいる。「このままじゃ、私はお母さんが嫌いになる……」と小学校一年生になった娘に言われて、はたと自分のやってきたことはいったい何だったんだろう、子どものためと言いながら、掻いている姿が許せなくて、自分の言うことをきかせてきただけだったんじゃないか、と気づいたと言う。

「がんばらなくてもいいんだよ」と言う私に「なぜ、がんばることを超えられたの」と聞かれたことがある。そんな、たいそうなことではなくて、

私もつらかったから、楽になりたかった。それに、「がんばる」ってそんないいことじゃないんだと思うようになっていた。

アトピーもその子の一部

それでも、「アトピーはこの子がずっとつきあっていくこの子の体質なんだから、キリキリしてもしょうがない」と、離れて見られるようになるにはずいぶんかかった。

保育園に預けて働くようになった最初の一年が一番つらい時期だった。桂が三歳、麦が一歳。麦は痒いと言って泣いて掻きむしるし、保育園の午睡でも痒くて熟睡しないし、小さい子を預けて働くことへのプレッシャーや負い目もあって、「もっと子どもに目を向けてください」という保育園からのメッセージを、いつも自分が責められているように感じていた。アトピーで手のかかる子どもを見てもらって申し訳ないとか、自分は母親として失格だと思われているんじゃないかとか、先生の言葉にも過剰に反応していたように思う。食事療法で特別に食事を作ってもらうのも、申し訳ないという思いで言い出しにくかった。

でも先生方も給食室の方たちも栄養士さんもとても快く応じてくださった。食事療法を始めて二年になるが、いまは麦のほかにも数人のアトピー特別食仲間がいて、みんなのおかずがスパニッシュオムレツだと、中身のスパゲッティ大盛りとか、おやつがクッキーだとおせんべいとか、変則メニューをときどきうらやましがられたりもするようだ。

アトピーの子を預かるのはたいへんですか？

――アトピーの子どもを預かるのは、たいへんなことが多いですか？　保育園の先生に聞いてみた。

「え？　べつに。私もアトピーだったから、痒く

てつらいのが、すごくよく分かるんですよ。食事だけはダメなものがあるから気をつけてますけど、あとは、痒がったら膝に抱いて撫でてあげるとか、冷たいタオルで冷やしながら軽く叩くとか。気を配り過ぎてへんに特別になっちゃうのもイヤだし。普通の子と同じですよ。たいへんだなんて思ったこと、ないですよ」。

「アトピーといってもその子の一部だから、そのまんま受け入れるっていうか、それだけですよ。いろんなハンディもった子がいるでしょ。目に見える身体のハンディの子もいるし、外見は普通でもみんなの中に入れないとか、一人ひとりみんなハンディをもってますよね。そのひとつっていうか、ただその子のありのままを受け入れてあげたいと思っているから、アトピーだからってそんな特別に考えたことないなあ」。

「同じアトピーといっても子どもによって、薬を飲んだり、塗ったりする子もいれば、漢方だけの子もいるし、食られないものも違ったりしますけど、それぞれに合わせるのは当たり前だし、それは苦じゃないですね。だから、お母さんがどうしてそうしたいのか聞きながら、相談しながらできればいいんじゃないかと思います」。

どの先生にお聞きしても、質問自体が意外だというように、「アトピーもその子の一部」として普通に受け入れているという答ばかりだった。日常の保育で感じていたことだけど、こういう保育園で受け入れてもらっていることを嬉しく思った。

アトピーの子どもをもつ、同じ保育園の友だちはこう言った。

「保育園は、いろいろ見てアトピーの子を受け入れてくれるところを選ばないとやっぱり無理よ。アトピーを特別扱いして働くお母さんを責めるよ

うなところに預けても、負い目を感じ続けて、働くのがつらくなるもの。小さな子どもがいると職場でストレス感じて、その上お迎えでも、家庭でもストレスだったら、ストレスの三重苦だもの。

お医者さんってお母さんの愛情が……っていう言い方する人が多いけど、アトピーの子のお母さんってみんな自分を責めてる気がするのよ。自分自身の中にも負い目があるし。でも共働きのいいところって、どちらも昼働いているから、夜痒いって子どもが泣くと父親も関わらざるを得ない。一人で抱え込まなくていいところじゃないかな」。

アトピーの子も当たり前に受け入れてくれる保育園が珍しくなくなることを期待したいと思う。

子どもだって「息抜き」したいよ

私は相当めんどくさがり屋だ。「あー、めんどくさ」がママの口癖だねと娘に言われる。アトピーを超えた！　と言ってみたいところだが、いつも自分のことで精いっぱいで、子どもに目がいっていないというのが実情かもしれない。「甘える時間が少なすぎる」と娘に文句を言われる始末である。でもいまが楽。あんまりがんばらないで、つらいときも、元気なときも、みんなに助けてもらいながら（助けてあげられることは喜んで助けてあげながら）やっていければと思う。

そんな自分をあえて肯定して言うとすれば、アトピーでゆきづまっているお母さんは、もっと自分に目を向ければいいんじゃないかと思う。すこし子どもから離れて「息抜き」したらいい。

子どもだって、いつも監視されているのはたまらない。アトピーを気にし出したら泥んこ遊びもさせられない。でも保育園でどんなに泥んこになろうが、そのうちきっと「まあ、泥んこになって、おもしろかったのねー」と言えるようになるんじゃないかな。

（『くらしと教育をつなぐWe』編集部）

アトピーとの戦い

村田　和子

私の家族は夫、私、小六の英行と小三の敬憲（たかのり）の四人です。私が「十年たったら家を建て替えたいね」と言ったら、二男の敬憲が「お母さん、もう僕家にいないよ」「え！　どうして」「だってプロ野球の選手になっているもの」ですって。去年からお兄ちゃんの後にくっついて、町の野球クラブに入り監督やコーチにしごかれても、いやだと言わず毎週日曜日の練習に行っていました。今年も四月から始まる練習が待ち遠しいようです。将来の夢は大きい！　ガンバレ！

敬憲が明るくなってきたのは小学生になってからです。それまでが大変でした。

生後一か月から頬に湿疹ができ始め、三か月健診でアトピー性皮膚炎と診断されました。病院で「赤ちゃんにおっぱいをあげているのでお母さんが三大除去をして下さい」と言われました。三大除去食とは、卵、牛乳、大豆の入っている物を食べないで他の物で栄養を補うことです。毎日ノートに何を食べたか書き出し病院で先生や栄養士さんに見ていただきました。八、九か月におむつかぶれや貨幣状湿疹が体中にできたり、病弱でよく風邪をひき月に何回も病院通いをしていました。

「どうして、湿疹ができるのだろう、こんなに頑張って除去をしているのに」「どうしてうちの子だけ」と思い悩みました。違う病院や皮膚科の医院も二、三か所行ってみました。小児科と皮膚科の先生のおっしゃることが違い戸惑いましたが、私は塗り薬をつけて治すより、除去食でやってみようと思いました。でも良くならず焦るばかり。夫は私に子どものことを任せきりで、私はいらいらし、夫や長男に当たり、悲しく涙が出て、いっそ子連れで死のうと思ったことさえありました。でも長男がいるし、今の医学で治らないことはないだろう、今に治ると信じ、「やるだけの事はやってみよう」と思うようになりました。

二歳の時、ぜんそくがでて夜中に病院へ吸入に何度か行きました。少しでも体力がつき友だちをたくさん作ってほしいと思い三年保育で保育園に入れました。卵、牛乳、大豆の入っている給食やおやつの時は家から持って行きました。

担任の先生が、皆と同じように食器に食べ物を移して下さいました。湿疹がまたできたので、食器に油が付いていたのか、洗剤がいけないのかと心配になりました。調理師さんに調味料を持って来てくれれば作って下さると言われ、これで少しは楽になると喜んだのも束の間、お鍋は前に卵や牛乳を使って料理したお鍋ではないだろうか、アレルギーの強い子は、お鍋を洗ってもそれを使うと反応すると聞いていましたので、私はすごく神経質になっていました。もう保育園をやめるしかないと思い、慣れてきたのに三か月でやめてしまいました。

そしてお弁当の幼稚園が近くにありましたので移りました。アトピーは良くならず、米、小麦もいけないと言われ、主食にきび、粟、ひえ、アマランスを食べ、調味料もきびしょうゆ、粟みそなどに替えました。でも湿疹は良くならず、病院の先生もお手上げで皮膚科を紹介され、薬を全身に

塗られミイラのように包帯されました。「家でも包帯をして下さい」と言われ、夫と二人がかりで冬の夜ストーブの前に立たせ「動いちゃダメ」と言いながら巻きました。体をかいていると「かいちゃダメ」「どうしてかくの」「だってかゆいんだもの」。敬憲も私がいつもいらいらしていてため息ばかりついているので、暗くなり口数が少なくなってしまいました。

病院で「敬憲君が一番大変なのよ」と言われ、あ、そうなんだ、「かいちゃダメ」と言っても私自身かゆい時かいてしまい、我慢ができないのに、何を言っているのだろうと、反省しました。私が落ち込んで暗くなっている時、夫が冷静になって私の話を聞いてくれるようになりました。そしてみんなで敬憲を励まし、上の子は自分だけ市販のお菓子を食べると敬憲が羨ましがるので我慢をし、家族みんなで同じ食事をしました。

年中の十一月、東京のアトピーで有名な先生がいる病院で診てもらったところ、IgEの数値が高いといわれ、一人で一か月半入院しました。心配で夫と交替で週四回程通いました。敬憲は、私にいやなことなど話さず明るくしていました。夜はかかないようにと手にミトンをされ、ベッドに縛られたそうです。食事は回転食できび、粟を主食にし、魚、肉はうさぎ肉、カエル肉などがでました。家の中のそうじをして下さいと言われ、ふとんは丸洗いに出し、隅々までそうじをしました。

一か月半で皮膚がきれいになり帰って来ました。でもどうしてか、三日位したらポツポツと湿疹ができてきました。家でも回転食にしたのに、食費が肉、調味料など普通の三倍位高く、お金がかかっても治してやりたいと思っていたのに、ショックが大きかったです。それから民間療法をしたり、いいと聞いたことは色々しました。

年長の十一月、友達から「東京・五反田にある病院の食養内科に行ってみれば」と勧められ、思

いきって入院しました。その病院は自然食の考え方で米は五分づき、野菜、魚、大豆、ごま等の食事で敬憲はとても喜びました。色々なメニューを出して下さり、食事が楽しみでした。

敬憲は見る見る湿疹が良くなり、肌がつるつるしてきました。私は栄養士さんから料理を教わり、一か月半で退院しました。

敬憲が小学校へ入学した頃は目の周りに赤く少し湿疹ができていただけでした。

小学校へ入ってからは、体力もついたせいかアトピーは少し出てもひどくなりませんでした。季節の変り目にぜんそくが出ますが、ぜんそくも出なくなり、丈夫な体になってほしいと願っています。まだ卵、牛乳はあまり食べていません。親の管理できるのも、もう少し、その後は自分で管理しなければなりません。

幼稚園の時、敬憲が「どうして僕アトピーになっちゃったの」と何回も私に聞きました。私はそのたびに胸が痛くなりました。

除去食をするまでは、私たち家族は平気で何でも食べていました。市販の野菜、安い卵、肉など。でもアトピーは子どもを通してあなたの食生活が間違っていると神様が教えて下さったのだというアトピーの本を見ました。うちは、敬憲を通して添加物や農薬の少ない物を選び、食の大切さを知り、たくさんの人たちと接し、アトピーの会で会員同志悩みを話し合ったり、遊びに行ったり料理講習をするようになりました。

前、ニュースでいじめに合い、中学生が自殺したと聞き、敬憲が「僕は死なないよ。だってまだラーメンもハンバーガーもアイスもケーキも食べてないんだから」と言いました。私は、こんなにも思っているんだとびっくりしました。

これから先、本人も大変ですが、自覚し、家族全員、力を合わせて生きていきたいと思います。

（アトピッ子・みるくせーきの会）

みるくせーきの会

田坂　幸代

二年前先輩の栄養士さんから、アレルギーの子を持つ親の会〝アトピッ子・みるくせーきの会〟の事務局を引き継ぎました。この会はアトピー性皮膚炎や喘息などの症状で悩んでいるお父さん、お母さんの集まりです。一～二か月毎に開かれる例会では、ハーブガーデンへ行きハーブの効用について勉強したり、当院の小児科の先生の学会報告や、除去食の調理実習などを会員で企画し運営しています。私は食物性アレルギーの栄養相談は経験してはいるものの、お母さんの悩みを聞くことができるのか少々不安でした。

会に集まるお母さんたちはみなさん真剣です。「うちの子、最近あまり調子が良くない」などと子どもの状況や、「○○のスキンケアは良かった」「牛乳も飲ませてみた」「漢方は？」と、テーブルを挟んで盛んに情報交換をしています。初めのうちはこの熱心さに圧倒されてただ座っているだけでしたが、最近はいっしょに来る子どもたちと遊びながら会話に参加しています。お話を聞いているとちょっと伏し目がちでうまくいかないと話していたお母さんも、話が済むと表情が少し和んでいたり、緊張しながらも話をした後の顔がうれしそうだったりしているのを見て、自分のことや子どものことを仲間に聞いてもらうって、大切だなと思いました。大人だけでなく子どもたちも、一緒に調理実習をしたときなど魚ソーセージをおいしそうに、いつもより多く

食べているとお母さんに聞くと、私の方までうれしくなりました。

みるくせーきの会のみなさんはほとんど除去食を経験しています。牛乳・卵・大豆を抜く三大除去や、米・小麦・豚肉まで抜く六大除去や、魚も制限されたり、油も一切駄目と症状によって除去食も様々です。食事療法中の苦労話はやはり〝食べるものが無い〟が一番多く、一日中献立を考えていたり、毎日同じ献立になってしまって大変だと言います。けれど食べ物の大切さや、どのように作られているのか、食品添加物や農薬のことを知って良かったと話してくれました。

私もアレルギーの食事療法は、病院に勤めてから知りました。牛乳も卵も大豆も食べられない、これじゃあどうやって栄養をとるのと思いました。そこで教わったのが「食べ物にはいろいろある」でした。牛乳・卵・大豆の代わりに、魚を毎食一切れと野菜（含青菜）を毎食片手山盛り一杯と芋と海草の組合せで日本人の栄養所要量がとれます。もし医師から食事療法をと言われたら、まず今の食事はバランスよく食べられているか見なおしてください。一日に三食、食べていますか?子どものおやつは食事の一回分です。お菓子・ジュース漬けになっていませんか? そして除去するものはしっかり避け、食べられるものを十分食べる。それと食事療法中は食事の記録を付け、医師や栄養士に見てもらいバランスよく食べられているかチェックしてください。

人にはそれぞれ自分にあった食べ物、食べ方があると思います。これは食べられないから違うものにしようなど、その人にあう食べ物の選択ができるようお手伝いできたらと思います。そのためにも患者さんと情報交換をしながら、食べ物についての知識をたくさん蓄えておかなくてはと痛感しています。

みるくせーきの会もアレルギーが良くなってやめていく人がいれば、どうしよう困ったと入会する人

もいるでしょう。悩みを出しあったりまた学習できる場としての大切な〝みるくせーきの会〟です。これからも応援していきたいと思います。（長野中央病院）

アレルギーなんて大したもんじゃない

山田　真

ぼくは障害児の運動に関わってきましたし、自分自身も障害児の親です。ですから難病をかかえたり重い障害を持つ子どもやその親とも沢山のつきあいがありますが、障害児の親は一般につきぬけたような明るさを持って元気に生きています。が、それにくらべてアレルギーと言われた子どもの親は暗い顔をしている

「うちの子はアレルギーなんでしょうか」「この赤いのは、やっぱりアトピーの湿疹でしょうか」心配そうに問いかけてくるお母さんに毎日のように出会います。こういうお母さんに「そうねえ、やっぱりアレルギーでしょうねえ」「これはまちがいなくアトピー性皮膚炎でしょう」といった答をすると、まるでガンの宣告を受けたかのように、落胆と苦悩の表情がうかびます。

ことが多いようです。

どうしてかなと思います。アレルギーなんてそれほど大したものじゃないのに、どうしてそんなに恐れるのかなと思うのです。

こんなふうにいうと、「うちの子どもは重症で、大したことないなんていってられるような状態じゃない」といった反論が必ずきます。

ぼくはもう二十五年も小児科医をしてきましたが、ぼくがみてきた子どもはほとんど自分が仕事をしている東京の八王子市周辺の子どもに限られていますからその視野は広くはありません。

だから大言壮語するわけにはいかないのですが、でもぼくのところへ通ってきたアレルギー性疾患の子どもたちはちゃんとよくなっていきます。それも、特別の治療をするわけでもないのに自然によくなってくれているのです。

ぼくの治療は「いずれは良くなるからゆっくり待とう」という気分を、アレルギーの子どもやその親と共有しようということに尽きます。

一貫した治療方針があるわけではありません。例えば気管支ぜんそくの場合、ステロイド（副腎皮質ホルモン）を長期間のみ続けることだけはしませんが、それ以外はなんでもありで、子どもやそのお母さん、お父さんとどんな治療をするか決めていきます。アトピー性皮膚炎の場合、ステロイドの軟こうには弱いもの、中等度のもの、強いものがありますが、弱いもの以外はほとんど使いません。それだけをルールにして、あとはなんでもありです。

なんでもありの中には「無治療」というのもふくまれます。この無治療の例を紹介しましょう。

Nちゃんは四歳。ある日、お母さんに連れられてぼくの診療室にやってきました。一見して全身がグチャグチャという感じの重症アトピーでした。お母さんの長い話を聞きます。

Nちゃんが生後六か月でアトピーを発症して以来、お母さんはあらゆることをしてきました。厳格

な食事制限をしたこともあれば、一日三回ずつ家の中の掃除をしたこともありました。漢方や針治療など東洋医学も試みました。ただ強いステロイド軟膏は使いたくなかったのでそれは避けましたが、周りの人が「これはよい」とすすめる方法はひと通り試みたのです。しかし、Nちゃんは少しもよくなりませんでした。そこでお母さんは「ここで腹をくくって、一切の治療をやめ、ほっとくことにしよう」と考えたのです。「もうなにもしたくないのだが、それでいいか」という問いへの答を求めてぼくの所へ来たのでした。

ぼくとしては、「お母さんがそうきめたならそれでいいだろう。アトピーが生命に関わるわけでもないし」と適当な返事をしてお茶をにごしてしまいました。本当はステロイドを含まないぬり薬やかゆみ止めの抗ヒスタミン剤、細菌感染を除くための抗生物質ののみ薬など使ってみたかったのですが、なんとかこらえて、お母さんを見守ることにしました。

Nちゃん、そしてNちゃんのお母さんとお話をするだけの診察が二週間毎に行われました。

もちろん、Nちゃんは少しもよくならず、グチャグチャの姿のまま待合室に現われます。

「こんなにグチャグチャじゃ他の患者さんの印象が悪くなるなあ。この診療所へ通ってもアトピーはなおらなそうだと思われてしまうだろうし」とぼくは気をもみました。なんとか少しでもいいからよくなるための治療をしたいのです。でもその気持をこらえ続け、なんの治療もしませんでした。

そしたら、六か月たったころ、突然Nちゃんはメキメキとよくなりはじめました。なんとも奇蹟的ですが、本当にそうだったのです。

そしてその後の六か月ぐらいでNちゃんの肌はきれいになってしまいました。

「人間のからだというものは、外からよけいな働きかけをしなければ、自分の力で病気をなおしてしまうこともある」、ぼくはそんなふうに実感しました。

Nちゃんの場合、特筆すべきことがあります。

それはお母さんがとても明るくて「こんなにひどいアトピーなのになにも治療をしてやらなくて悪いお母さんですね、わたし」などと笑っているとNちゃん自身もニコニコしているという風で、親子ともに全然悲愴感がなかったことです。

どんな病気でもストレスがマイナスに作用するのは確かなようですが、アレルギーによる病気の場合、ストレスの影響はひときわ大きいように思われます。

子ども自身、そしてその親がストレスから解放された時、病気はどんどんよくなるようです。

医学はずい分進歩したように見えるけれど、ある病気のその後の経過を予想する力はまだまだ弱いように思われます。例えばはな水とせきが少々出ている子どもについて「これから先、熱も出るでしょうか」とお母さんなどから聞かれた時に、正確に予想できるお医者さんは大変少ないようです（実際は皆無といってよいと思います）。

こんな近い将来のことも予測できないのですから、まして五年、十年ということになればとても予測できるものではありません。どんな病気にも最良の経過と最悪の経過とがありますが、どうも最近は最悪の経過をたどることを想定して、予防的にいろんな薬を使うという治療が流行しているようです。ぼくはそういうやりかたに賛成しません。最良の経過をとると信じて、のんびりと、ゆったりと、楽天的に治療をしていく方法を採ります。

子どものからだは変っていきます。よい方向にも悪い方向にも変っていく可能性はありますが、なるべくストレスを除き、過保護にならず、薬は最小限にして良い方向へ向かう手助けをしたいと思っています。くれぐれも思いつめないで下さい。アレルギーなんて大したもんじゃないと笑いとばして下さい。そこから道は開けていくものですから。

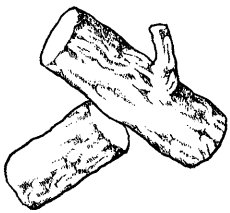
（八王子診療所）

今、思うこと

山下　恵美

私は縁あって保育の世界に入ることになりましたが、大学卒業後すぐに幼稚園に勤めたわけではありませんでした。それは、何気ない一言や行動が、子どもの人生や人間形成に大きな力を及ぼしてしまうこの職業に、自分のような者が携わって良いのか自信が無かったからです。正直にいえば、責任の重さにこわさを感じていたのかもしれません。

そして、保育者として園生活を送るようになって四年たった今も、保育者の言葉の重さを実感させられるような場面にたびたび出会い、考えさせられています。実際に子ども達をまえにして一層悩ませられることは、話を聞いている相手が一人ではなく、十人十色、感じ方や受け取り方が本当に違っていることです。響いて欲しい子にはさほど響かず、そうでない子に響きすぎてしまうということが、案外多くあるように思います。次に挙げるエピソードも、その一つだと思いますが、心に残っていることなのでお話ししたいと思います。



三歳児、二十六名のクラスです。二学期に入り多くの子ども達が、二、三人の友達と安定した関係を持ち、小集団で遊びこめるようになってきた頃のことです。T君はまだうまく友達にかかわることができず、突然、友達の遊びを壊したり、近くにいた子を押したり叩いたりして、トラブルになることがよくみられました。また、「＊＊のばかやろう」などと、荒々しく相手を傷つけるような言葉を使う場面も多くみられました。私はT君の荒々しい言葉使いが気になっていましたが、注意してなおすことができるような状況ではなくそのままになっていました。ところが、しばらくして、他の子ども達もおもしろ半分に、人を傷つけるような言葉をまねして使うようになり始めました。その状況は、ほうっておくわけにはいかないので、クラス全体の問題として取り上げてみることにし、子ども達の前で、次のような話をしました。

T　みんなは、ばかやろうっていわれたらうれしいですか？

C　うれしくない、いやだ、バカって言った人がばかなんだよ、などなど。

T　先生は、ばかって言われたら、ここが（胸をさす）痛くなるの。頭が痛いときや、おなかが痛いときには、治す薬があるけれど、いやなことを言われて痛くなったお胸には、付けるお薬がないんだって。みんなも、いやなことを言われたり、意地悪なことを言われて、元気が出なくなることがあるでしょう。先生は、自分が言われていやだと思うことは、お友達にも言わない方がいいと思うの。みんなは、どう思う？

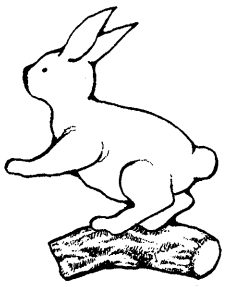
C　言わない方がいい。

T　よかった。じゃあこれからみんなで気をつけようね。

このような内容の対話でしたが、子ども達は真剣に耳を傾けてくれました。

さて問題は、S君に起きました。S君とT君はトラ

ブルが多く、二人が近くにいるときは、心配で目が離せませんでした。トラブルになるとS君がいつも泣いていました。そのうちにS君は、T君とのトラブル以外でも泣くことが増えていきました。あまりにちょっとしたことでも泣いているので、仲の良い友達との関係も悪くなりはじめていました。ある時、またS君が泣いていました。「どうしたの?」と聞くと「T君がSのバカって言った。Sのお胸が痛くなるの」そういってなおも泣いています。S君のこの言葉に、私はドキッとしました。どちらかといえば、T君はすぐに「ばかやろう」などという言葉を使ってしまう方です。もしかしたら、そのたびにS君の胸は痛くなっていたのかもしれません。おそらく、私の話を聞いて以来、S君の胸は何度も痛くなっていたのでしょう。私の話は、S君には響きすぎてしまったようでした。S君がよく泣くようになったのは、友達のちょっとした言葉に敏感になったことがきっかけではなかったかと思います。その後のT君とS君ですが、T君は友達と関わりがみられるようになり、落ち着いて園生活を送るようになりました。S君も、少しのことで泣いたりしないように励ますなどして、いまでは、ほとんど泣くことはなくなりました。T君とS君が一緒に遊ぶ姿もみられるようになり、二人が一緒にいても安心して目を離せるような状況になりました。



S君の気持ちに気がつくことで、クラスを良い集団へと向けていくことも大切なことだけれども、それとともに、一人一人の子どものことも大切に考えていかなければいけないのだということをあらためて感じさせられま

した。そして、集団と個々の両方を育てていく難しさを、一層実感させられました。自分の発した言葉が、子ども達にどれだけの影響をあたえているのかを忘れず保育していかなければいけないのだと再び感じさせられた出来事でした。

さてもう一点、今思っていることをお話しさせていただきたいと思います。手遊びをしたり、絵本を読んだり、話し合いなどをする時、全ての子ども達が、私の方に集中してくれる瞬間があります。そんなとき、私は複雑な思いになります。子ども達に聞く態度をみにつけさせたり、話を徹底させるためにも、しっかりと聞かせることが必要です。しかし、子ども達の前に立つ自分に、ときどきゾッとすることがあるのです。それは、ほんの少しでも優越感や満足感を感じている自分が居ることに気がつくからです。子ども達よりも上の立場にいて、思ったように子どもを動かそうとする自分に気づき、自己嫌悪に陥ることがあります。確かに、子ども達は、生まれてからまだ三年しか経っていませんので導くべき場面が多いことはわかっています。そして、それが私の仕事であることもわかっているつもりです。しかし、感情や利害観を保育の中に持ち込んで、子ども達に接したり、導いてはいけないと思うのです。そうは思っていても、まだまだ未熟な私は自分に負けてしまうことが多く、何度も反省を繰り返しています。次に挙げるエピソードも、反省させられた一場面です。

三学期、イメージの世界で遊べる劇遊びをと思い、ペープサートで「おおきなかぶ」をつくりました。ペープサートは作成が容易なわりに、何度も楽しめて、子ども達にも扱いやすい教材です。私は、ペープサート劇が好きで、子ども達にも何度か見せていました。

さて、自由遊びの時間に少しずつ作った「おおきなかぶ」は、子ども達の興味を引いたようでした。「ぼく、かぶのやく」「あたし、おばあさん」などといって役決めをし、「うんとこしょ、どっこいしょ、それ

でもかぶはぬけません」などとやっています。「こんどぼく、おじいさんになる」「あたし、いぬ」などと、役を替えて何度も何度もやっています。せっかくの劇だったので、お客さん席を設けました。

さてさて、三歳児は、人前で発表するのにも「やりたい、やりたい」とおおさわぎです。子ども達は、うまく発表するというよりも劇をやることだけで満足なようです。しかし、そこで私の利の欲が出ました。せっかく人に見せるのだからできるだけ良い劇を見せたい、という本当に子ども達には失礼な思いです。大きな声ではっきりと言わせなければだとか、笑っていたり、ぼーっとしないでちゃんとやらせなければだとか、全く子ども達の楽しさを半減させるような勝手な思いです。保育者が「もっとちゃんとに」と思ってしまうことで、子ども達は何を得て何を失うのでしょうか。

「もっとちゃんとに」は、ふっとしたときに現れて、私を惑わせます。子どもの姿を見極めて、「もっとちゃんとに」とうまくつきあっていかなければいけないと思います。目の前にいる子ども達の興味はどこにあるのか、そして、子ども達の成長を願う上で大切にすべきことは何なのか、と常に考えていられる保育者でいられたらと思います。

三歳の子ども達にとって、保育者の意見というものは、たぶん絶対的なものがあると思います。お山の大将になることなく、時に、理解し合える友達であり、母であり、人生の先輩でありたいものです。そして、客観的に自分をみつめられる保育者であり、一人一人の子どものために思い悩み、少しの成長を祈り喜べるような保育者でいられたらと思います。

（市川学園第二幼稚園）

トポスにおける発達

第 8 回

子どものビオトープとしての園環境

無藤　隆

生態学的な場としての園環境

トポスとして園環境を見直すことは、その心理的な特性を探ることなのだが、別な一面としては、生態学的な視点を導入することでもある。生態学とは、特定の場所における生物の相互依存的な関係を解明するものである。従って、生態学的な視点とは、そのような相互依存的な視点により人間関係を見直すことにある。それは一方では、一人の子どもを囲む多数の直接間接の人間関係の網の目を分析することになろうし、もう一方では、特定の場所での具体的な活動の中での子どもの行動を取り上げることになる。これらが通常子どもの発達での生態学的なアプローチと称されるものである。

その特に後者に入るべきことだが、心理学や保育学でほとんど検討されていないことに、場所のもっている物理的な特徴の影響がある。これは通常環境心理学の中で研究されており、既にこの連載でも触れたことがある。様々な環境のあり方が子どもの活

動にどのように影響するのかが問われるのである。その問いをさらに一歩進めて、とりわけ幼児の活動にふさわしい園環境のあり方を求めたとき、子どもの動きの多様性とその共存を可能にする環境のあり方とは何かという問い掛けが生まれる。

幼児にとって、様々な動きを一人であるいは数人で出来る環境が成り立つことが好ましい。広々とした空間があり、必要な道具があれば、それを作り出せるほど幼児は自律した力を持っていない。環境のあり方によりその動きは大きく変わるのである。例えば、滑り降りる動きは、滑り台があったり小山があったりして初めて可能になるのであり、自分たちで積み木などを使って構成するのは多くの幼児の力を越えている。あるいは、人から隠れるのはそれなりの穴に類した場所があって可能になる。いちいち自分で作るのは手間が掛かりすぎる。だからこそ、小さい子ども向けの公園や幼稚園では滑り台やトンネルが設置されているのである。

子どもの動きを生物にたとえて考えてみると、一人の子どもがその気分に応じて異なる動きをするときに、異なった種類の生き物になるのだと見なしてはどうだろうか。異なった活動をするもの同士は別々の種類であり、独立の活動が可能でなければならない。互いのその動きを妨害してはならない。また、一人の子どもが時間を追って多種多様な活動をするのであろうから、その間の移行が容易でなければならず、つまり、異なる活動をする場所が隣接していなければならない。その上、一つの活動をする子どもたちが完全に独立していては具合が悪いはずである。ある程度互いに交流があり、新たなメンバーの参入があったり、お互いの遊びが目に入ることにより、遊びが活性化するからである。

ビオトープの考え

生態学的に好ましい環境として、種の多様性が確保されることを考えることが最近強調されている。

特に、自然環境を復元する場合に恣意的にある特定の生物（例、蛍、鮭）を復活させようとするより、多くの野生生物がその環境に生きられることを目標とするのである。生物が相互依存的に生きているとすれば、一つの種類を復活させても意味がなく、それを含めてその環境に本来生きているはずの多様な生物が生きられるようにしなければならない。しかし、直接にそれは出来ない。各々を個別に別な場所で育成してその場に放したところで、生きられる環境になっていなければすぐに死ぬだけだからである。すると、本来どのような場所で生きているのかを調べ、多くの種の生物が生きられるような環境をしつらえ、実際に生物が生存していくのを見守ることが出来ることになる。生態学の用語を用いれば、生態学的ニッチェを多種多様に用意することである。その点からは、単調な自然環境（例えば、芝生、杉林）などはいかに美しく見えても好ましいものではない。そこで生きられる生物は極めて限定されているからである。

ビオトープとは自然生態系の場の意味であり、多種多様な生物が生きられる場としての特性を持つ場所を指している。ビオトープが多様に設定され、種の多様性が確保され、発展するのであれば、そしてその多様性がその地域に元々あった条件と比較的近いものであれば、自然生態系の復元は成功したと判断できる。もちろん、過去のことは正確にはわからないし、いつの過去を取るかで事情は変わるのであるから、たかだか一つの目安に過ぎない。

生物研究者で自然環境の復

元のリーダーでもある杉山恵一（杉山恵一『ビオトープの形態学―環境の物理的構造』朝倉書店、一九九五）は、種の多様性を実現するための環境の物理的な特性に注目してその分類作業を行っている。杉山によれば、「それぞれの種が要求するニッチェは、形状もスケールもさまざまであるが、本来の自然環境は、それらのすべてを過不足なく提供していた、と言うより、自然界の準備するそのような大小無数の構造にしたがってさまざまな種が分化してきた」（P.24）のである。その際に、人間の存在が自然環境を破壊するだけではない。種の多様性という観点から見れば、伝統的な住まいは必ずしも種を減少させてきたのではない。

「人間側の要件には、これら共存生物相を排除するものは少なく、より複雑な条件が付加されることによって、より多くの生物が誘致されてきたと考えられるからである」（P.24）。その状態を著しく変えたのがコンクリートや鉄に代表される工業製品や農薬の多量使用による動植物の死である。田圃のあぜ道や小川がコンクリート化され、多くの小生物が生きることが出来なくなった。「これらの工業製品の特徴を一言で言うならば、多次元的構造をもたない、つまり単純構造であること、堅牢で容易に穿孔を許さないこと、栄養的に無意味であること、つまり、食害・腐朽などを受けないことなどである。これらは人間の利用面できわめて理想的な素材である。しかしながら、その特徴は、人間以外の生物の生活にとって、まったく無意味なものであるということであり、それらによって構成される環境は生物にとってはきわめて不利なものとなった」（P.25－26）。だから、多種多様な生物を人の生活の回りに生きさせたいのであれば、それらが生きられる素材を導入し、種の多様性を可能にする環境を用意しなければならないのである。

子どもの話から離れたと思えるかもしれない。しかし、そうではない。多様な生物が生きられない環

境で子どもは真に生き生きと意味のある生を送ることが出来るのか。送られるにしても、それを我々は好ましいと思うのかが、直接に問われているのである。便利で安全な生活を捨てたくはない多くの（私を含めた）現代人にとって、その問いは大きなジレンマを呈する。せめて、自分の住まい以外のところの公園等において、自然環境を復元しようというのが現在の妥協点であるように思える。園の環境はその中間にあって、子どもにとって安全でありながら、ある程度自然をも導入されたものであるべきだろう。その方策が探られねばならない。

ただし、ここでの議論はその方策自体ではなく、ビオトープの物理的な構造の分類を行っている杉山の作業に学びつつ、子どもの多種多様な活動の共存を可能にする環境条件を探ろうということなのである。以下では、杉山の分類を紹介しつつ、園環境での物理的な環境に当てはめたときの可能性を述べよう。

物理的環境の分類

まず、物の大きさを分類する。巨大（山など）、大（人工の丘や建築物）、中（家屋以下から人体程度）、小（人間の持ち運びうる程度）、微小（手の平に載せうる程度）、極小（肉眼に認められうる程度）までを想定する。形としては、基本として、凸構造凹構造があり、それが様々に変形される。次のような分類である。

a 凸構造（山）
b 凹構造（くぼみ）
c うね構造（凸構造を横に延ばしたもの）
d みぞ構造（凹構造を延ばしたもの）
e 段差（傾斜面が片側だけに存在する場合）
f 穴（深さが口径を越える凹構造としての底のある場合）と孔（同じく底の抜けた場合）
g 突起（穴の逆構造）
h 壁（うねの高さがある限度を越えた場合）と裂け目（みぞの深さがある限度を越えた場合）

i ちぎれた構造（元のところから離れて存在する物、気体の中の個体など）

i－1 粒状構造（立方体の場合）

i－2 棒状・線状構造

i－3 葉状構造

i－4 中空のちぎれ構造（ゴムマリのようなもの）

i－5 内部構造をもつちぎれ構造（多くの人工物）

i－6 管と筒、箱と袋、蓋つき中空構造

j 隙間・間隙・包隙

園環境での子どもの活動から見た分類

次に、園環境での子どもの活動を念頭に置いて、今紹介した分類毎に園では何が具体的には見られるのかを考えてみたい。

a 凸構造

小山・築山などが典型的である。子どもはそこに上がり、回りを見渡す。頂上からそりで滑り降りる。低い山であれば三輪車や自転車で降りるかもしれない。ジャングルジムや滑り台も同様に凸構造であろうか。滑り台は縦に細長いので、突起的な構造でもある。いずれも、高く登り、そこから滑るなり飛び降りるなり一歩ずつ降りるにせよ、高低の移動を特徴とする。これらはまた一種の障壁としても働く。鬼ごっこの場合に、上に乗っていれば安全だとするとか、そこに逃げ込んで追いかけにくくする戦法が取られる。

小さな凸構造としての置き石の類は、その上を飛んで移動するのに使われる。

建物自体も凸構造だが、その特性を生かして、例えば上に登るといったことは少ない。中の空洞を利用するか（保育室の利用）、子どもの移動を遮る役を果たす。

b 凹構造

水が入れられれば池がこれに当たる。雨が降って

水たまりが出来るとすれば、凹構造があるからである。地のくぼみ程度の穴を掘るのは凹構造を作ることになる。かなり大きなものもありうるが、小さいものになれば、砂場の遊びがそれに当たるだろう。

cうね構造

畑があればまさに畝が出来る。平均台のようなものはうね構造をもっており（下は中空だから棒と呼んでもよいが）、その上の一方向的な移動の場となる。道ばたの少し高い部分や線路やあぜ道などもうね構造だろう。園の中にはないにしても、行き帰りに出会うかもしれない。川があれば、その土手がうねの構造である。このうね構造は共通にその上を生物が（電車なども含め）移動していけることが特徴である。土手なども人に限らず多くの生物が移動に用いるという（コリドーと呼ぶ）。

園の中の移動の空間としての外廊下や渡廊下などは庭に対してうねに類した構造をもつ。上履きと下履きを区別する場合、上履きで移動できる空間としての意味を持つことになる。それがどの程度の範囲に及ぶかは子どもの行動を大きく規定する。

dみぞ構造

みぞはうねに対して相対的に規定される。その代表は川であろう。小さな川を園内にもつところもないわけではない。湧き水や上流からの水を利用して園内に引き込み、人工的な川を作っているところもある。U字溝や蓋のあるそれを園内に引いて排水しているところもあるかもしれな

い。そこには小生物が生きているはずであり、それをどう生かすか、子どもの接触をどう可能にするかは、安全上難しい問題がある。

小さなスケールでは、割れ石や壁、木の肌などの割れ目がある。それをなぞって遊ぶ子どもがいる。

e 段差

階段、廊下や教室から庭に出るところ、ホールの舞台、などに段差がある。大型積み木や跳び箱などでこしらえることもある。子どもはそこから飛び降りたり、座り込んで友だちの遊びを眺めたりおしゃべりしたりする。

f 穴と孔

砂場に掘る穴とか、小山に設けたトンネルなどが代表だろう。手を通す、汽車を通す、自らが通り抜けるなど、そこを通過する物である。穴を積み木などで作ってそこに篭もり内緒話をしていることも見受けられる。独特の親密な空間を形成するのであろう。

土に見つけたアリの穴を掘り返すことなどもあるかもしれない。木や土、壁などの穴が見つかると子どもは喜んで探索する。

g 突起

凸構造がさらに高さが増した物である。典型的には柱や木であろう。それに登り、上から見渡すことが出来る。また、木はもちろん木陰を形成し、落ち葉を下に落とすし、様々な生き物をその内に含めている。草も同様に突起として子どもの遊びを邪魔したり、面白くしたりする。また、その中に様々なもの(虫や忘れ物)を隠し持っているのも特徴である。

h 壁や裂け目

柵や垣根、塀がこれに当たる。ある種の生き物の往来を妨げ、別な生き物の往来を可能にする仕掛けである。そこで何が往来し、あるいはしないのかが

子どもの活動を大きく変える。例えば、動物と接するのに、柵や檻を介してなのか、中に入ってのことか。動物を外に出すのか。

裂け目や隙間に小さい子どもが入り込んで遊ぶことを見ることがある。

i ちぎれ構造

小石や砂、土などはすべてこのちぎれ構造としても見ることが出来る。粒をふくんでおり、その結果、ちぎれやすいし、他の物がそこに入り込みやすい。掘ったりもしやすい。

棒や紐・綱、管なども子どもの遊びに欠かせない。自分たちで作ることもあるし、既にあるものを持ち運んで利用することもあり、固定されている物を使う場合もある。葉状のものは、葉や紙、布である。これも重要なことは言うまでもない。

函構造をもつ物は人工物できわめて多い。蓋がつけば、扉・窓として、出入り・出し入れ自由なものになる。

粒状のものが多く集合した場合に、「スポンジ構造」と呼ばれる。生物にとってきわめて豊かな居住環境となる。

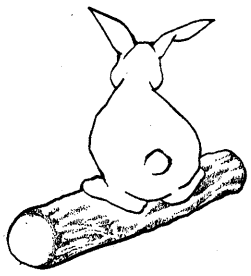
有機的な空間を目指して

以上の分類は今のところ素描に過ぎない。言いたいことは、小さな子どもの活動する空間が、平たい大きな運動場のような空間や四角い箱としての建物の連なる空間ではなく、ここで分類してきた様々な要素を持ったものとなることである。そうであって初めて、子どもの活動が多種多様なものになりうるからである。ビオトープのような生物的な空間こそが子どもが遊び、活動する空間のモデルとしてふさわしいはずなのである。

（お茶の水女子大学）

ポーランドの虹

松井　とし



ワルシャワ郊外にあるショパンの生家を訪ねる途中、大地から高い空に向かって立ち昇る虹を見た。それはこれまでに見たこともないほど、色鮮やかな、太くて力強い虹だった。

昨秋、ポーランドの学校を尋ねる機会に恵まれた。侵略により世界地図から何度も国名が消されたポーランド。首都ワルシャワから南へ三〇〇キロメートル程の古都クラクフは、中世のたたずまいを今に残す美しい町だった。郊外にあるアウシュビッツ収容所では、犠牲になった人たちの髪の毛、靴、メガネ等がうず高く積まれた展示の中に、小ぶりのケースに納められた乳幼児の小さな靴や手編のケープ等がひっそりと置かれていた。夕闇が刻々と迫る中をビルケナウ収容所にも立ち寄る。一〇〇メートル毎に整然と立てられた威圧的な監視塔が広い敷地を取り囲み、引き込み線の二本のレールが遙かかなたの黒い森まで続いている。役に立たない子どもと老人は、即、森の奥に運ばれたという。コル

チャック先生と子どもたちも、貨車に乗せられこのレールの上を通ったのだろう。

一夜明けて学校訪問の朝は、明るくさわやかだった。迎えてくれた子どもたちの瞳もキラキラと輝き、口々に「ジェンドブリ！」。参観した授業は、いずれも先生の熱意と子どもたちの意欲に満ちていて、言葉の分からない私たちをも強く引き付ける興味深いものだった。

六年生の図工の授業で一人の女の子とのふれあいがあった。ブラックの絵を思い出させる静物を描く授業であったが、後ろからみていると、その子は紙の上にたまった絵の具を一心にティッシュで拭き取っている。遠い昔の体験が急に懐かしく蘇ってきた。まわりの友だちの出来ばえも気になるようすで落ち着かない。授業の最後に絵が友達にプレゼントされることになったが、目が合う人がいないのか彼女は絵を持ったまま立ち尽くしている。「私にいただける？」、そっと肩を叩くと、振り向いた顔がパッと明るくなった。席に戻ってからまわりの友だちに「私の絵、あの人にあげたの」と言っているのか、こぼれるような笑顔が何度も振り向いた。子どもたちと共に在る時、傍らのおとなも言葉の壁を越えて微笑み、共感し合うことができる。子どもたちの無垢な笑顔は「われら地球人」と語りかけているようだった。変化の時にあるポーランドだが、あの大きな虹と子どもたちのすばらしい笑顔が、これからの国づくりを象徴しているように思われた。（元幼稚園教諭）

保育の窓(2)

保育の技術(2) 幼児理解

原口　純子

「幼児理解」がよく分からない

幼児の事実に即して、幼児理解ができることは、大切な保育技術です。

しかし、保育の現場には幼児無理解が沢山あります。

お弁当の用意ができてから、長々と待たせておあずけをしながら、食事のマナーの指導をしている先生、泣いている幼児にどうして泣いているかをしつこくきいて、ついに「泣いていちゃわからないのよね」としかってよけい泣かせている先生等々。

保育は幼児理解に始まり幼児理解につきると言われます。しかし、幼児を理解していると自信を持って言える保育者がどのくらいいるでしょうか。

保育関係の本や教育論文、保育雑誌等あらゆるところに「幼児理解」の重要性は説かれています。

「保育の大前提は幼児理解である」「暖かい関係が幼児理解である」「幼児理解が保育の出発点です」

と言う具合に用いられていますが、「幼児理解」が良く分からない人にとっては、出発点からつまずいてしまうことになります。「暖かい関係が幼児理解です」というのも良く分かっていない人にとっては、すぐには理解しがたい言葉です。「幼児理解」そのものが理解されずに、言葉だけが空回りしているように思われます。

「幼児理解」とはいったい何をすることなのでしょうか。「理解」を調べてみると、これは中々含蓄の深い言葉です。広辞苑によると、

物事の道理を悟り知ること

1　意味をのみこむこと

物事がわかること　例　文意を理解する

2　人の気持ちや立場がよくわかること

例　理解のある先生

と記されています。

日常生活の中で用いられる「理解」を考えてみると、「算数の足し算を理解する」の理解は足し算の意味が分かる、やり方が分かることです。

「消費税の値上げについて、国民の理解を得る」という場合の理解は国民が消費税の値上げを納得する、承知する、受け入れる、許容するを意味します。

「夫の釣りの趣味を妻が理解する」という場合の理解はお金を道具や装備にかけ、休日毎に早朝から釣りに出かける夫を容認する、許容する、支援する、心を添わせる、きずなを深める、援助や助力をおしまない、行動を共にする、などであり、飛躍的解釈をすれば愛することなのです。

こうして考えてみると、幼児理解が、幼児の行動について訳が分かる、意味が分かるばかりではなく、むしろ幼児の気持ちや立場がよく分かることであり、心を添わせて受け入れる、きずなを深める、許容する、容認する、支援するなどの意味であることが分かります。究極的には幼児を愛することに通じると思います。

幼児理解の方法

実験や調査統計による理解

測定したり、特定状況を作って実験場面での反応を見て、統計処理を行う理解の仕方。

観察による理解

実験場面では自然な状態が把握できないことから、幼児の行動観察をして動きや言葉や遊びの種類等を客観的に記録し、数的に処理して発達レベルを捕えたり、行動記録の意味を解釈して幼児の心を分ろうとする方法です。

観察は保育者が見る、聞く、触れる、嗅ぐ、感じるの五感を働かせて、幼児についての情報を得ることです。保育の場面に遭遇して、保育者が何を感じるかによって、かける言葉も態度もちがってきます。感じ方はそれぞれの主観ですから、観察記録も主観的になります。保育は保育者の主観で成り立っているのです。観察は大切ですが、記録取りに熱中することには疑問があります。

観察の目は幼児と観察者が対峙することであり、寄り添う目ではないのです。しかし、全体を見通したり、把握する意味で、見て感じる幼児理解も現場では大切です。幼児の動きや興味の対象、仲間関係の育ちなどクラスを経営するものとして、幼児を良く観ることは欠かすことのできないものです。

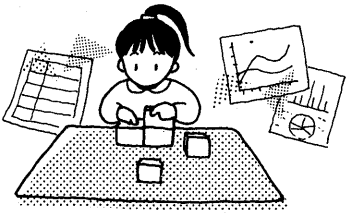
心を添わせて受容する理解

今日求められている幼児理解こそ〝心を添わせて受容する〟であり、いわゆる共感的理解なのです。

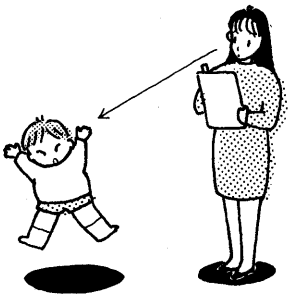
かなり以前の『幼児の教育』誌の津守真先生の記事のなかに、養護学校のトイレでトイレットペーパーをちぎっては流し、ちぎっては流す子どもにずっと先生が共に居て、流れるペーパーを見ている話がありましたが、読んだ当時、筆者にはこれが何であるのかよく理解できませんでしたが、今、これ

こそ〝心を添わせて受容する〟幼児理解であったと心啓かれました。人を育てる基を見る思いです。

観察記録を取っては心を読む先生よりは、一緒にいて幼児の心を感じて、心を添わせてうなずいてくれる先生の方が幼児にはうれしいのではないでしょうか。



▲調査実験による理解



▲観察による理解

▲共感的理解

カット・佐藤和代

資料や情報による幼児理解

幼児を理解するという場合に客観的な資料や情報も見逃せません。

ごく一般的に幼児理解というと左記のような客観的な状況把握を思い浮かべる保育者は多いのです。

生年月日、家族構成、兄弟関係、保護者の職業、住所、住居、心身の健康、既往歴、性格傾向、興味

関心、好きな遊び、生活習慣の自立、友達関係、もちろんこれらは大切な幼児理解です。

生年月日を教師が頭に容れておくことは、発達理解とつながり、大切なことです。

小学校の校長先生が兼務していた幼稚園に園長として異動した時に、出席簿が五十音順になっていました。筆者は幼稚園の出席簿は是非幼児理解の上からも生年月日順にしたいものと思います。五十音順は保育者が幼児の名前を探すのには便利ですが、幼児の生まれ月を覚えるのには便利ではありません。月齢は幼児理解のたいせつなポイントです。

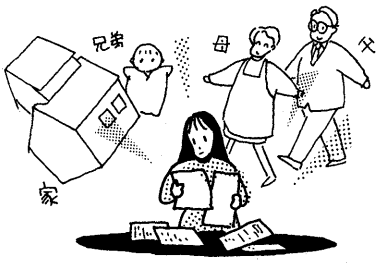
幼児を取り巻く状況の把握

赤ちゃんが生まれたとか、マンションの三階に住居があり、家でとびはねることをいつも禁止されている等、それぞれの幼児の背負っている家庭の状況は幼児に影響します。園生活だけでは解決のつかない問題もたくさんありますが、幼児を取り巻く状況の把握は幼児理解に欠かせない大切な情報です。

例　妹が生まれた

近頃何かといっては頑固にすねる四歳のA男を、ああ先月妹が生まれて母親にかまって貰えず気持ちが充たされないのだと理解しただけでは不十分で、頑固に自分を主張せずにいられない気持ちに寄り添い、幼児なりのプライドや自信をもって立ち直ることを援助するところまでが幼児理解なのです。

保育という行為は幼児の事実を見ることによる理解、幼児をとりまく状況の理解、心を添わせて受け入れる理解等実に様々な幼児理解とそれに添った保育者の援助によって成り立っています。



▲資料や情報による理解

幼児理解はカウンセリングマインド

平成五年度より文部省は中堅の教諭を対象に保育技術専門講座を都道府県単位に開設しています。この講座の主な内容としては幼稚園教育に必要な専門性として、カウンセリングマインドの理解と、その姿勢を身に付けることを求めています。

トーマス・ゴードン博士の「親業」も幼児理解を単なる知識としてではなく、訓練により言葉づかいや態度を身に付けることを主張しています。

幼児と生活を共にする保育者はプロフェッショナルな力としてもっともっとカウンセリングマインドを学びたいものです。

発達理解

四歳児の六月頃に庭に白線を描いて「へびじゃんけん」をしている実習生がいました。じゃんけんぽんとは言っているのですが、じゃんけんがよく分かっていないし、ゲームのルールも理解できていないのですから、ゲームなどになりません。

素話でよく語られる、「アナンシと五」「エパミナンダス」（東京子ども図書館「おはなしろうそく」）等も大人はやさしい話として、幼児によく語りますが、幼児には意外にその面白さが理解できないようです。ユーモアとか話の落ちというのは幼児にはむずかしいことが分かります。

保育をする上で、発達理解は欠かすことのできないものです。

四歳の五月にセロハンテープをどのように与えるか、油粘土をどのように幼児に経験させるか、発達理解というのは、実に細々した日常にかかわることなのです。

「子どもの事実」

斎藤喜博（一九一一―一九八一）先生の著書（国土社『教師の仕事と技術』）の中にしばしば出てく

る、「子どもの事実」「目の前に動いている事実」という捕え方に大変教えられました。保育の場では「実態の把握」という言い方をします。しかし、この「子どもの事実」という捕え方は、はるかに鋭く「今」を問うています。

まさに、幼児理解というのは、瞬間瞬間目の前に起きる「子どもの事実」に目をそそぎ、心をよせて思いを汲み取ることであり、適切な援助をすることこそ保育なのです。

例　失敗したミニトマト

五歳児のクラスで、植物栽培をする時に、赤い実のなるミニトマトを選びました。「私のトマト」という気持ちで育てさせたいと思い、一人一鉢にしました。素焼きの六号鉢にそれぞれアクリル絵の具で絵をかき、後日小石をいれ、赤玉土を三センチ程いれ、プランター用の混合土をいれ、二ミリに満たないトマトの種を三つぶずつまきました。テラスにずらりと鉢をならべて待つこと数日、双葉が出てきました。幼児は「ぼくのに芽がでた」と大喜びで、登園するとすぐトマトの所に行きせっせと水やりを欠かしませんでした。ところが、何日たっても双葉から本葉がでないのです。そしてついに、次の変化はあろうことか、双葉が黄色くなってきたのです。その年は雨の多い日照の少ない寒い夏だったのです。失敗を天気のせいにしたのですが、幼児には、栽培の喜びどころか、種はまいても育たないこともあるという寂しい経験を持たせてしまいました。

なぜ双葉から本葉がでなかったのでしょう。これは幼児と共に鉢で植物の栽培をする場合の保育者の幼児理解の不足によるのであると後で気付きました。幼児が自分の鉢を大切に育てるということは、毎日欠かさず水をやるという行為なのです。雨の日でも水やりを欠かさない生真面目さ、幼児のこの事実を理解していれば、水をザーザーやっても根腐れを起こさない水はけの良い土作りが必要だったのです。翌年は土に腐葉土をまぜ水はけを良くして成功

しました。

幼児の行う行為、ひとつひとつの事実に心をよせて許容したり、援助したりすることが保育の過程なのです。

人形を取り合ってつかみ合いになったA子とB子、駆け回って机の角に足をぶつけて泣いているC夫、ひもごまがまわるようになってうれしさいっぱいのD夫と保育の現場は「幼児の事実」に満ち溢れています。「事実につき事実を作り出す仕事こそ、教師にゆだねられた仕事である」と斎藤喜博先生は述べておられます。事実を見つめず、起きた事実に気も付かず、ぼんやり過ごす教師のもとでは、幼児の成長は望めないのです。

幼児の保育者理解

本当に幼児を理解するという事は、幼児を愛することなのです。自分に委ねられた愛する幼児のために保育環境を整え、教材を準備します。好奇心に満ち溢れ、やりたい気持ちいっぱいの幼児達の気持ちを満足させるだけの準備がなければなりません。

大人が思うよりはるかに、幼児は保育者理解をしています。保育者の立場をかばったり、思いやったり、気を使っている幼児がいることに気付かねばなりません。

どうぞ日々の保育が、幼児に失礼のないように、保育者は幼児理解に努めたいものです。

（洗足学園短期大学）

ある日の育児日記から

(66)

佐藤　和代

圭は一年生。このごろ、保育園の時の友だちと会うと、親同士の話題は我が子の失敗談ばかり。親も子も新米ですから、忘れ物や勘違い、笑える話にはことかきません。その中から二つほど。

その一　M君。朝、教室にはいったら、前の黒板の「きょうおやすみのひと」のらんに、自分の名前がありました。自分は今日は休み！　と思ったM君、そのまま帰ってしまいました。あわてたお母さんが電話すると、先生が違う子と名前を間違えていたとか。

その二　Kちゃん。一年生になって大はりきり、毎朝、家で一番はやく起きて、学校へも一番のり。ある日「ママ起きて！　もう行かなきゃ！」と、お母さんを起こしました。寝坊したかとあわてて起きたお母さん、急いで朝食を食べさせ、送り出してからホッとして時計を見ると……6時半。しばらくしてKちゃん、「門があいてない」と泣きながら帰ってきました。

さて、圭はというと、私が仕事を休んだ日、圭は「圭も休みにする」。学校は保育園と違うの、お母さんがいるからって休めないの、と説明すると「えっ知らなかった、ホント？」

こらこら。

本当よ！

おててつないで学校へ。何だかなつかしい光景です。

子どもが嫌がる人形劇

永野むつみ

「楽しかったのですが、ウチの子は途中でちょっとアキてしまったようでした。子ども席から振り向いて〝おかあさん〟なんて手を振るんですもの」

「そうそう、連られたように振り向いて〝帰りにアイスクリーム食べて帰ろうね〟なんて言っていたお子さんもいましたね」

観劇後の交流会でのご感想。この日の出し物は『ばばばあちゃんのいそがしいよる』（さとうわきこ原作、松原由利子台本、演出。上演時間十五分）と、『すえっこねこのルウ』（さとうわきこ原作、永野むつみ脚色、演出。二十五分）。話題になっているのは『ルウ』。

確かに、ついたての後ろで演じていてもその手応え——スッと引く感じがある。でも私は心配していない。たいていすぐに舞台に帰って来る。それに振り向きたい気分は、私にも分かる。観るのが嫌になったのだろう。止むを得ないなァというところ。

こんなふうに、途中で観客が「素」に戻ってしま

うような人形劇はダメな人形劇なのだろうか。

子どもは繰り返しが嫌い？

『すえっこねこのルウ』は、四人の兄姉妹の物語。もちろん猫の生態を描いたものではない。登場人物を猫にすることで〝ある日、あるところで＝パラレルワールド〟となる。両親はでかけていて子どもたちだけで留守番をしている。ルウ以外の三人はそれぞれ家事をまかされている。お姉ちゃんは洗濯、小(ちい)姉ちゃんは皿洗い、お兄ちゃんは掃除だ。ルウもみんなと同じように手伝いたいのにうまくいかない。結果としてみんなの邪魔をしてしまう。しかし外で遊んでいなさいと押し出されたルウは、思いがけず大きな魚をつりあげてしまう。汚名挽回。めでたしめでたしというもの。

子どもは繰り返しが好きだと言われるが、やはり内容にもよるようだ。

初めに小姉ちゃんと取り合い皿を割ってしまう。次にお姉ちゃんの干した洗濯物を竿ごと落とし汚してしまい、さらに掃除が済んだお兄ちゃんのバケツをひっくり返し水浸しにする……。失敗のコラージュ。懲りずに失敗を繰り返すルウにあきれ「もう止めろ」「いいかげんにすれば」「ルウはバカじゃないの」とまで言い出す。

ヤジの応戦

もちろん「またなんかやるよ。ほらやった」「やっぱり」とケラケラ笑っている子どももいる。そういう子どもはルウの何気ない仕草——水に濡れた足を拭いてもらうシーンなどで「ルウかわいい」と言ったりする。間髪を入れず「かわいくなんかないよ」という声も聞こえる。ルウ擁護派と非難派のヤジがとび交う。このやりとりが実におもしろい。子どもたちの〝今いるところ〟が見え隠れする。舞台に心を預けた子どもたちは無防備だ。

「ウチの子、あんなこと言ってる」

保護者や保育者にとっては、舞台上のドラマよりもっと興味深い光景を目にすることもままある。

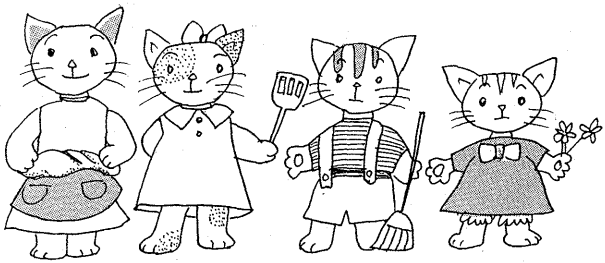
いろんな受けとめ方があっていい。缶詰めだって上から見ると丸いが、真横から見たら四角いのだ。立場によっていろんな見え方があるということは知っていてもいい。十人十色。違う考えの人もいるのだ。大勢で観る楽しさのひとつがここにある。

おかあさんはどこ

振り向く子どもはこのあたりで〝おかあさん〟とやるらしい。退屈なのか。否。確かにアキてはいるのだろうが、ドラマに入りすぎたための結果とも言えないか。つまりこれでもかこれでもかと続くルウの失敗にアキアキした。ハラハラドキドキに疲れてしまい現実に戻りたくなったというところ。〝おかあさん〟と呼びかけひと息をつく。母親の顔をみて安心して再び舞台に帰って来る。こういう見方もあっていい。

むしろ私が最近気になるのは「おとうさんとおかあさんは出かけていて、四人だけで留守番をしています」と紹介して始めたはずなのに「おかあさんは？」と登場を期待する声が増えていることだ。しかも早い段階で。

初演は一九八九年。そのころもあるにはあった。ルウの失敗が三回も続くと、「おかあさんはいないの」「おかあさんはどうしたの」と誰にともなく



▲「すえっこねこのルウ」　カット　山根　裕子

言う子どもはいた。不安な感情をもて余しているのかな、おとなに解決してもらいたがっているのかなと感じた。ところがこのところ、ひとつ目の失敗の後、すぐに「おかあさんは?」とくる。〈二場〉でお姉ちゃんが登場すると「あ、あれがおかあさんかな」と。途中でお姉ちゃんだと分かると〈三場〉に期待して今度こそ、と思うらしい。明らかに男性の声で歌っているのに「あれがおかあさんなんだ」と言い切る子どもさえいる。

なぜだろう

どうしてすぐにおかあさんなのだろう。子どもだけで決着をつけるなんて思いもよらないのだろうか。解決を急ぐのはなぜか。問題を抱え続けられないひ弱な懐だということか。母親との密着度がますます増しているということなのか。失敗は成長のもとだったはず。いずれにしても「末っ子ってなあに」と言う子どもたち、「兄弟」の中に父、母、ときにはペットまで入れて数える子どもたちが少なくない今、四人の兄姉妹の物語は、もはや夢物語だということか。

ちなみに原作では、母親も登場していたが作者の了解を得て、子どもたちだけのドラマにした。私は、おとなのいない空間で、子どもたちはどう動くのか、どんなことをどんなふうに話すのか、とても興味がある。

まるでボクみたい

この物語は、実に日常生活的に展開する。とりわけ、ルウと三人の兄姉とのやりとりは、セリフの内容も言い方もかなりシビアだ。人形もどこの家庭にもひとつやふたつはありそうな素朴で親しみ易い形、色、大きさだ。それらの人形がホットケーキを焼き、皿を運び、洗濯をし、掃除をする。歌をうたい、言い争いもする。ドラマと言うより生活のスケッチ風。「まるで、さっきまでの我が家です」「あ

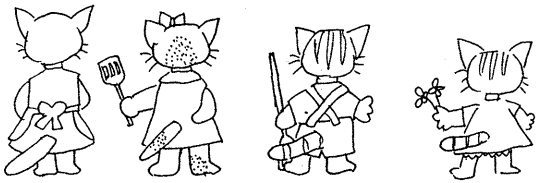
の口うるさい小姉ちゃんは、私です」とおっしゃるおとなもいる。いわゆるファンタジックでドラマチックな物語を期待して来た観客の中には、肩すかしを喰ったと思われる方もいるかも知れない。

一方、「あれは人形なんだよ。ボク知っているんだ。下で動かしている人がいるんだよ」と、観劇の途中で突然叫ぶ子どもがいる。初めからそんなことはみんな分かっているはず。わざわざ言葉にする、その心情を思うと愉快だ。人形役者冥利につきる。きっと人形が、まるで生き物のように見えた瞬間があったのに違いない。甦生——これこそファンタジーではないのか。

人形なのに、人形のくせにと知らず知らずの間に引き込まれていく。ウソッコとホントッコの間を行ったり来たり。人間がやったら何でもないことでも人形がやると何やらおかしい。人形のぎこちなさが誇張を生む。人形の動きやもの言いを笑いながら、ふとそこに自分自身を見る。観客がスッと引くのはそのせいもあるかも知れない。うがった言い方をすれば、人形劇ならではの世界の核心——人形劇の暴露性に、直感的に反応したということではないのだろうか。

子どもが手離しで喜ぶ人形劇だけではなくて、途中でちょっと嫌になるのもあっていいのではないかと思うのだが、いかがなものだろうか。

（人形劇団ひぽぽたあむ）



編集後記

今月の特集は、「アレルギーとつきあう」です。アレルギーをもつ子どもたちと生活を共にする保育者にとっては、アレルギーを「どう治すか」ではなく、「どうつきあったらいいのか」が問題になります。

アレルギーの子をもつお母さんの体験談、そんなお母さんの悩みを受け止めてくださるお医者さん、栄養士さんなどのお話しに耳を傾け、一緒に考えてみたいと思います。

私の娘も、重症ではありませんがアレルギーとつきあってきた一人です。特集の記事を読んでいるといろいろなことが思い出されました。

まず、滲湿性中耳炎になりました。なんとか「治して」あげたいと隔日に病院に通った時期もありました。「耳にチューブを入れる」ことで普通に生活できると納得するまでに随分時間がかかりました。つぎに、喘息の発作です。何度かの入院の後、発作が出るまでの症状、そのときの薬の飲ませ方など、娘の症状への対処を知ったころ、発作になることがめっきり減っていました。

娘は言いました。「私、もう大丈夫だよ。お母さんが、私の病気のことわかったから」と。それを聞いて、予測のつかない発作への不安が私を動揺させ、そのことのために娘が不安な思いをしていたのだと気づかされました。お母さんにとって「大変だ」ということが、子どもにとって大変なことになってしまうのかもしれません。

（A）

幼児の教育
第九十五巻　第六号
（一九九六年六月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成八年六月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社フレーベル館
〒113東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

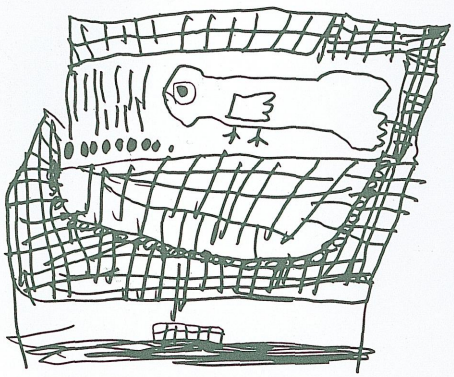
☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

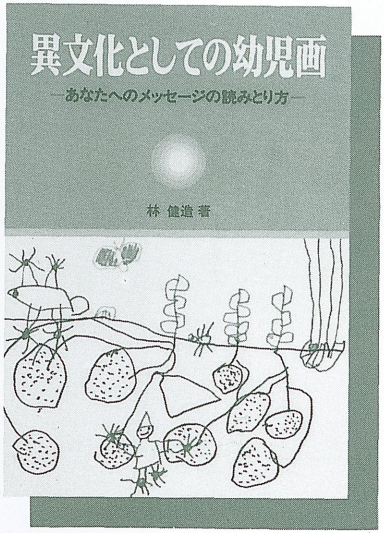
☆万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

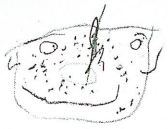
異文化としての幼児画
―あなたへのメッセージの読みとり方―

幼児の絵は特別の意味をもっています。それはあなたへのメッセージでもあります。幼児の表現を読み取ることが大切です。それを理解することによって適切な援助の仕方がわかってきます。

新刊







- 幼児の生きた造形表現がわかります。
- 発達による絵の読み取り方がわかります。
- 実際の造形表現の援助の仕方がわかります。
- 現職の園長としての保育譚(ばなし)を楽しみながら保育の心が身についていきます。

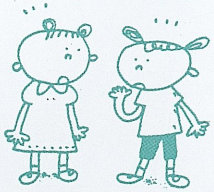
林　健造・著

A５判・160頁・定価1,500円(本体1,456円)

キンダーブックの
フレーベル館

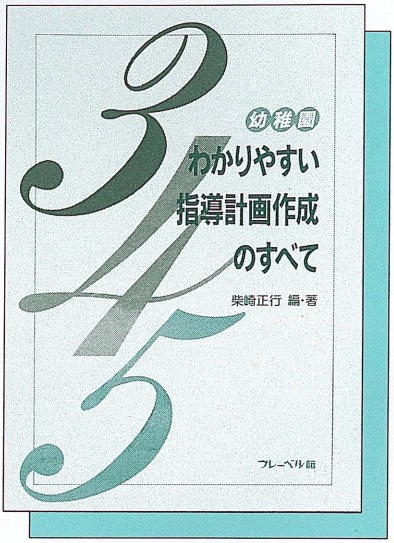
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼稚園 わかりやすい指導計画作成のすべて



新刊

新しい幼稚園教育要領の主旨に沿った、年齢別指導計画。
◎年間指導計画
◎各月の月案例
（子どもの姿、保育のポイント付）
◎週案例・日案例
◎幼児指導要録の記入例
実践に基づく実例及び、計画立案のプロセスがわかる解説付。
新しい保育観にそった実践のために役立つ一冊です。



柴崎正行　編著

B５判　304頁　定価2,600円（本体2,524円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。